



トータルトリックの法則のズレと修正

2020.7.17

トータルトリック法則がズレてくるケースにダブルフィットしているときがあります。例を見てみましょう：1963 年の世界選手権のアメリカ-イタリア戦の第 134 番ボード EWバル、ディーラーE

♠ —
♥ AKQJ74
♦ K8432
♣ Q10

♠ QJ964	N	♠ AK53
♥ 1098	W	♥ 3
♦ 5	E	♦ J96
♣ AJ54	S	♣ K9832

♠ 10872
♥ 652
♦ AQ107
♣ 76

クローズルームのEはイタリアのベラドーナで、5枚クラブ4枚スペードは彼らのシステム(ローマクラブシステム)から短い方のスペードからオープンします。Wのパビス・ティッツィは4Sとサポートしましたが、Nアメリカのシェンケンは2スーターを表す4NTと競ります。Sのレビントリットは5Dと選び、パスパスとEまで流れますが、ベラドーナはダブルします。しかしWはそれを5Sにテイクアウトしますが、Nはすぐに6Dと競ります。これはWまで流れますがWはダブルと言われ、これで終わります。1ダウンでEW 100点でした。

オープンルームの方はEアメリカのネイルが1Cオープン、Wのジャコビーが1Sレスポンスすると、イタリアNのフォルケが4Hとオーバーコールします。Eが4Sとサポートし、パスパスとNまで回るとフォルケは5Hとまだ頑張ります。しかしこれがパスパスとWまで回るとジャコビーは5Sとまだ頑張ります。これはパスパスとSまで回りますが、Sのガロツオがたまらずダブルします。しかし結果は5メーク 850点で差し引きアメリカへ750点の13IMPという結果でした。このハンドをトータルトリックで見るとNS側はダイヤモンドが9枚フィット、EW側はスペードが9枚フィットのトータルで18ですが、NSはダイヤモンドトランプで11トリック、EW側ではスペードトランプでやはり11トリックの合計22トリックとなって4のズレが生じています。EW側はスペードフィットしていると同時にクラブも9枚フィットしていますし、NS側もダイヤモンドと同時にハ

ートも9枚フィットしています。ズレの主な原因としてこのダブルフィットがあると考えられています。

一般にダブルフィットがあるハンドはオフェンシブなハンドと考えられ、競り合った時は、ディフェンスに回るよりもディクレアラ側になるようことん競るのがよいとされます。なぜならディフェンスに回っても2ndスートはこちらにフィットしているということは相手側は短く、こちらは取れないということです。そのスートの点数が取るトリックにならないということになります。この2ndスートのフィットありなしを早く見付ける手段を持っていることが競り合いビッドの秘訣であると言って良いでしょう。話はそれますが、ダブルフィットを見付ける手段にはフィットジャンプというコンベンションが有効になります。つまり競り合いの時にフィットを示すのにニュースートを(ジャンプしながら)示すとそれはサポートがあること同時にそのスートがあることを示し、パートナーにそのニュースートもフィットしているか判断させることが出来るからです。これについてはまた別に解説する予定です。

話を戻して1963年の世界選手権でのハンドですが、クローズドルーム、オープンルームともNS、EWともにダブルフィットしていたということに気づかなかったようですね。気づいていれば、オープンルームではガロツオはダブルでなく6Dと言ったでしょう。クローズルームでも、ベラドーナも4NTにかぶせて5Cと言っておけば、Wは2スーターフィットがわかって、たぶん6Sまで付き合ってしまったらと思います。(続く)